

研究ノート

実践報告「博物館における防災教育」

筑波匡介*

1. はじめに

2018年4月に博物館勤務が始まった。会津若松市民になり近所にご挨拶した際にかけられた言葉がある。引っ越した先の住民は、私たち家族を安心させるためだろうが声をそろえたように「なにもないところだが災害もない場所だ」と伝えてくれた。謙遜と冗談が合わさった挨拶のつもりだろうが、複数聞かれたこの言葉がこの地域の状況を表していると感じた。前職で防災に関わっている諸先輩に話したところ「すでに災害が始まっている状況と同じ」と私と同じ認識だった。災害復興支援に関わってきたのでさまざまな現場で「まさか自分がこんな目に合うとは思わなかった」と聞いてきた。いざという時のことを想像していないと被害を大きくすることになる。災害にあったときに慌てない地域になるには、まず子どもたちの意識を変えていくことから始め、その子どもたちが大人になり、その子が育つまで続け、災害に備えることが当たり前の、いくなれば文化なることをめざしたいと考えた。

可能性だけでいえば、会津にいる間は安全かもしれない。しかし、子どもたちは必ずしもこの災害のない会津で生活し続けるわけではない。大学生となり、社会人となり、リスクのある地域での生活が待っているかもしれない。想像する力をつけて、子どもたちにいざと言いつきに自分の命を守れるようになって欲しい。いざというときには困っている人たちに手を差し伸べられるようになってほしい。そういった希望をもって福島県立博物館で防災教育に取り組むこととした。

博物館活動として取り組んできた防災講座では「生きる力を育み」「自己肯定感を増し」「社会の一員として、地域課題に向き合う」ことを意識してプログラム作りを行ってきた。子どもたちに考えさせる、対話を生み出す防災教育として「我が事感」につながる授業提案について紹介したい。

2. 震災遺産チームビジョン

博物館にはミッション（使命）はあるが、その先にあるはずのビジョン（目的）がまだなかった。震

災遺産をどのように社会に還元するのか。我々がどのように行動していくのかを明確にするために、2019年から震災遺産チームビジョンの整理にあたった。およそ10年後になりたい姿を想定し、それに向けて事業を組むことにした。そして将来のあるべき姿として設定したビジョンを『博物館が地域と連携し、地域の知識と経験を共有しながら「地域の暮らしを主体的に考え未来に活かす場となる」ことをめざします。』とした。これらを達成するためバックキャストして事業を検討している。

震災遺産チームビジョンでの防災教育の定義として3項目を決めた。「歴史から福島の豊かな大地の営みを学ぶ」「震災遺産を災害の経験や教訓として活用する」「この地で生きる知恵をつけ、地域を主体的に考える力を育む」どちらかといえば、命を守る知識やテクニックを教えることよりも、災害は日常生活の延長にあるということを想像できるようにすることに重点を置いている。

おもに、被災状況を想像する。被災者に心を添わせる。自分がどう行動できるか想像することができるといったような設計をめざしている。

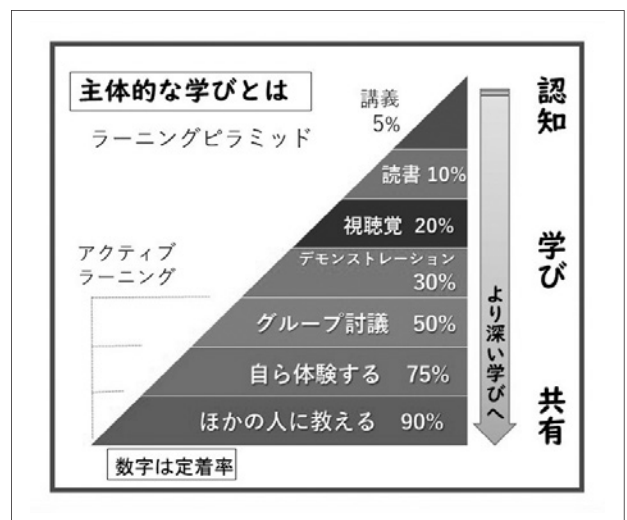


図1 ラーニングピラミッド
アメリカ国立訓練研究所資料から作図

*福島県立博物館

3. アクティブ・ラーニング

授業を行う際にはアクティブ・ラーニングについて意識している。アクティブ・ラーニングとは、『プレゼンテーションのような様々なアクティビティ(学習技法)を介して学習者が能動的に学びに取り組んでいくこと』(渡部2020)としていて、その目的は『教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。』(文部科学省教育課程企画特別部会2015) これを取り入れ、防災教育に活用している。未災地である会津若松では我が事感を持つことが何よりも課題となる。他人事で考えているのは、効果があるとは言えない。さらに『授業で経験したことや新たに得た新しい知識を自分がすでに持っている知識と関連づけ、テストが終われば忘れてしまうような知識と異なり、一生剥がれ落ちない知識と理解を得ること』(小林・鈴木・鈴木2015)を意識し、深い学びとなるように心がけた。

4. 授業づくりにむけて

今までに防災教育の実績がない博物館において、まずは知ってもらう機会をつくらなければならない。博物館も教育施設であるために、学校教員の研究会などに利用されることがある。その際に5分程度の時間で、「何ができるのか、どのような効果が期待できるのか」をお伝えした。ちょうど、2011年の東日本大震災の発生から10年が経過しようとしていて、当時の記憶・経験が無い子どもたちが増え、災害の風化などを課題意識として持たれる学校があった。また海から離れた会津地域では、東日本大震災における津波被害を伝えてもなかなか我が事感につながらないため、日常生活に近づけた話題を加える必要性も感じた。そのため、中山間地でおきた新潟県中越地震や、熊本地震の避難所での様子などの他県の被災状況も加えながら、この地域に求められる防災教育の教材化をめざした。

5. 授業の流れ

事前に学級の課題を聞くなど、教員がこちらに任せっきりにならないように授業相談から始めている。育てたい児童・生徒の姿、目指しているクラスの方針などをもとに、生徒・児童同士の話し合いの

時間を調整し、発表の方法を検討するなどした。先生方との意見交換から、授業は次の点については特に留意することになっている。①正解の無い答えについて考える。②対話の機会をつくる。③自分の意見を述べて、他人の意見を聞く。④誰かに伝えたい内容にする。⑤被災した実物を見ることで、被災地が自分の生活と地続きであることを知る。⑥相手の気持ちを想像する。相手の立場となって自分ならどうするか想像する。これらを教員の意見も聞きながら、その学級に合わせられるように心がけた。学芸員による一方的な講義のみでは、学習定着度が低い(図1)とされ、講義だけではなく、グループワークなどを取り入れるようにしている。グループワークでは、工作など要望によって変えているが、多くの場合、クロスロードゲームの手法を取り入れている。

クロスロードゲームの目的は「災害対応を自らの問題として考え、また、様々な意見や価値観を参加者同士共有すること」「災害対応においては、必ずしも正解があるとは限らず、また過去の事例が常に正解でないこともある。」「ゲームを通じ、それぞれの災害対応の場面で、誰もが誠実に考え対応すること。」「そのためには災害が起こる前から考えておくことが重要であることに気づくこと。」などが挙げられている。大地震の被害軽減を目的に文部科学省が進める「大都市大震災軽減化特別プロジェクト」の一環として開発され、2004年7月に発表された。『「クロスロード」とは、「重大な分かれ道」、「人生の岐路」のことであり、「神戸編・一般編」では、「人数分用意できない緊急食料をそれでも配るか」、「学校教育の早期再開を犠牲にしても学校用地に仮設住宅を建てるか」、「事後に面倒が発生するかもしれないが、がれき処理を急ぐため分別せずに収集するか」など、神戸市職員が実際に迫られた難しい状況判断がカードとして出題される』(矢守・吉川・網代) このクロスロードゲームをアレンジして、二者択一の問いから自分ならどうするか考える内容とした。正解がない答えに対して自分ならどうするのか、他人事として理解できない避難所での出来事を想像してみると、我が事感に近づけるようにした。

震災遺産には、避難所での出来事を伝える資料がいくつかあり、例えば掲示された役割分担を促す張り紙や、停電時に使われたろうそくといったもの、備蓄されていたスティックパンなど、避難所での出来事を想起することができる資料がある。今と災害時を地続きにすることができた受講者である中学生が意見を述べてくれたこともある。普段の生活と地続きにすることで、日頃からできる事、いざとい

う時にできることを考えることをとり入れている。

そして、避難所での出来事を伝えることで、例えば食事の配膳や掃除当番など、中学生がボランティア活動した事例紹介をしている。自分たちを同じ年代が、避難所で活躍していることを知ることで、大人がお世話するだろう避難所に対して、自分に何ができるのかを想像するようになり、結果、災害時にケガさえしなければ、誰かを助けることができることに気が付き、自己肯定感にも繋がっていく。我が事感を持つようになると思う。テイクホームメッセージとして「自分を守る人が誰かを守れる人」としている。これは横浜市民防災センターの壁に掲げられていた言葉でもある。

6. 震災遺産と問いを使う効果

令和3年度冬の特集展で『問い』を用いた展示を行った。また問いを作るワークショップについては、本号の別稿にて紹介した。それらも参考にしながら、授業にて活用を行っている。

牛が齧った牛舎の柱では、「あなたなら逃がしますか」「なぜ逃がすことができなかつたのか」「飼い主にどのように声をかけますか」といった投げかけを行っている。まず自分ならどうするのか考えさせ、つぎに逃がすことのできなかつた当時の状況を想像させ、飼い主にたいして掛ける言葉を考えることで、被災地や被災者へ想いを馳せる、心を添わせることにつながるのではと考えている。

語り部は、災害伝承、教育現場で災害の経験を伝える手段として活躍されている。ただし、被災地から遠く離れた場所までお越しいただくにはハードルも高くなり、オンライン形式も発達しているが、現実感をもって伝えることが難しくなる。被災地から離れた未災地であっても資料と問いがあれば、災害を我が事感を持って対峙する効果が期待できると考えている。

また、語り部の課題でもある高齢化や次世代への持続可能性なども、人の寿命よりも博物館資料はより長い時間対応ができる可能性があると考えている。つまり災害伝承の持続可能性の獲得を博物館活動によって達成できるのではと考えている。災害を伝える手段は多い方が良いと考えているので、他にも手段はないのか検討を続けていきたい。

震災遺産を使うことで、未災地においても我が事感につながれる可能性があり、持続可能性の獲得ができる可能性があり、より具体的に被災地と地続きにできる想像力の助けになるなど、効果があると考える。



写真1 授業風景（猪苗代中学校）

7. 実施後の意見

授業を受けた学校の教員に対して事後の聞き取りやアンケートを行っている。アンケートには可能な限り批判的な視点で記入いただくようお願いした。

「講座を受けたことで児童・生徒たちに変化が見られたか」については、「日頃行っている給食清掃等の活動が災害時に役立つという意識を持つようになり、日々の当たり前の行動を大切にできる児童が増えた。」「給食当番の仕事を以前より行うようになったと感じる。」「普段の地域の人々とのコミュニケーションが大切であることが分かり、次年度実施する地域ボランティア活動に向け意欲が持てた。」と意見をいただき、普段行っている学校活動に対して効果を感じていただいた。

自由な意見や感想については「具体的に子どもたちに考えさせる内容でとても有意義な講座だった。」「今回の思考の手法は、学校の事業でも活用できると思いました。」「聞くだけでなく、「話し合う」「活動する」を組み合わせさせていただき、とても実りある講座となった。」「少人数の話し合いや牛柱の展示紹介など生徒一人一人が真剣に考え取り組める良い講座だった。」「翌年度にも継続しての依頼も複数あり、効果を感じ取っていただく教員もいることが分かった。一方向ではなく、教員からの意見も反映させて、より良い提案ができるようにしたい。問いの手法は、誰でも取り入れられると考えている。

また中学校教員からの依頼は、小学校教員の依頼より目的意識があり、さらに高校になると明確な目的のもとで依頼がある印象を持った。今後も発達段階や目的に応じたプログラムの展開を進めたい。

8. 博物館の防災教育の展開について

自然学習などを行う福島県立会津自然の家や国立磐梯山青少年交流の家などに声かけして、自然学習と防災の親和性について意見交換し、協働体制を取った。学校だけでなく公民館での職員研修などにも情報提供した。当初わずか数校から始まったが、福

鳥島の「チャレンジ！子どもが踏み出す体験活動応援事業との連携プログラム」への登録も行えたことで、後押しもあり、体験プログラムやゲストティーチャーなど含めると年40回程度の講座数となっている。潜在的に防災教育へのニーズがあったとも考えている。

災害に関して資料を集め、それを防災教育に活用するのは、災害後に各地で整備されるいわゆるメモリアル施設だけが行うものではない。歴史の中で、地震、水害、火災などと考えると自分が住むまちが災禍と無縁ではないはずだ。災禍を受けてもそこから立ち上がる強さを学ぶことは生きる力につなげることもでき、地域ミュージアムならば防災教育に取り組むことは難しいことではないと考える。メモリアル施設の役割と、ミュージアムの役割は重なり、似ている部分こそあれ、そもそもの目的が違うはずである。地域の博物館としてその地域の災害に関する資料、情報は現代史であれ当然に扱うべきであろう。

防災教育が必修となり、さまざまな教科で取り入れられるようになった。例えば、高校地理総合や中学校家庭科など、かつてのように防災学習がより身近なものになってきている。社会のニーズが変わってきていることは明らかである。まだ学校教員の中では防災に関して専門的に研究された方は少ないだろう。博物館が持つ資源を提供し有効活用につながるようにしたい。

9. さいごに

毎年のように災害が起こり、「まさか自分が・・・」と聞く。私自身も令和6年能登半島地震で新潟市の実家が被災し、そなえていてもどうにもならないことも経験した。しかし、周りからの支援や、なにより被災直後の対応について知識があるか無いかで、その後の復旧の速度が違うことも体験した。今後も「もしもの時」に備えることの大切さを伝えていきたい。

謝辞

防災講座を構築し実施するにあたっては、多くの学校教員と福島県立博物館職員からアドバイスをいただいた。記して謝意を表したい。

参考文献

小林昭文・鈴木達哉・鈴木映司（2015.8.31）『現場ですぐ使えるアクティブラーニング実践』。産業能率大学出版部。

文部科学省教育課程企画特別部（2015）「アクティブ・ラーニングに関する議論」『論点整理補足

資料（5）』。

西川 純（2015.8.12）『すぐわかる！すぐできる！アクティブ・ラーニング』。学陽書房。

渡部 淳（2020.1.21）『アクティブ・ラーニングとは何か』。株式会社岩波書店。

矢守克也・吉川肇子・網代剛「災害対応カードゲーム教材「クロスロード」」『内閣府防災情報』。
<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/torikumi/kth19005.html>2023.12.10 access